

娘子の「情熱」はいかに作られたか

— 狭野弟上娘子歌「あめつちのそこひのうらに」試論 —

上野美穂子

一、はじめに

君が行く道の長手を繰り畳ね焼き滅ぼさむ天の火もがも (15三七二四)

右は、複数の高校国語教科書に掲載されている萬葉歌人「狭野弟上娘子」の歌である。何らかの特別な事情で遠方の越前国に赴くことになった夫（中臣宅守）との別れに際し、「天の火」でもなければこの絶望的な状況を解消できないとダイナミックに歌う一首であるが、江戸時代までの歌論書や注釈書類ではほとんど評価対象になっていなかった。^(注4) 明治後期以降、特にアララギ派の島木赤彦（『萬葉集の鑑賞及び其批評』一九二五年 岩波書店）や斎藤茂吉（『萬葉秀歌 下』一九三八年 岩波書店）らにより「秀歌」として絶賛され、彼らによって古代の「情熱派女流歌人」として「発見」されたことが、教科書掲載の下地を醸成したといえる。

この狭野弟上娘子（以下、娘子とする）の「情熱」について具体的に触れているのが、先掲『萬葉秀歌 下』における右歌の項目の「なお娘子には、『天地の至極の内にあが如く君に恋ふらむ人は実あらじ』（巻十五・三七五〇）というのもある程だから、情熱を以て強く宅守に迫って来た女性だったかも知れない。」（傍線稿者）という箇所である。先行研究では、この娘子の「情熱」は自明の前提として論じられてきた。^(注5) 無論この「情熱」的な表現は娘子の資質によるところが大きいのであろうが、「情熱」を掬い取る「器」^(注6) がいかに成り立っているのかという視点からの考察が手薄である。教科書で扱われる娘子の作品やその背景について新学習指導要領が求める「深い学び」を実践するためにも、この観点からの掘り下げが不可欠だと考える。

そこで小稿では、斎藤茂吉が指摘した「情熱」を有する娘子の歌（15三七五〇）に焦点化し、その「情熱」がいかに作られたのか、基礎的考察を行うことにする。

『萬葉集』では天地の果てを意味する表現（以下、天地の極限表現とする）は、「天雲のそくへ（そきへ）の極み」「天地の寄り合ひの極み」などに代表されるように、「くの極み」と表現されている（次節用例7～11・14～18参照）。この中で今回考察の対象とする娘子の歌のみは、『萬葉集』中の定型表現「くの極み」を用いずに「あめつちのそこひのうらに」という特殊な表現を有している（次節用例参照）。

天地の底ひの裏に我がごとく君に恋ふらむ人はさねあらじ (15)三七五〇)

(原文) 安米都知乃曾許比能宇良尔安我其等久伎美尔故布良牟比等波左祢安良自

一般的に当該歌は、「天と地の果てのうち」に、私のように激しく夫に恋している人など絶対にいないでしょう(『萬葉集四』岩波文庫 二〇一四)と理解されているが、実は後述するように諸注釈においてその解釈が定まっていなかった。先行研究の検討を通して解釈の定位を図ると同時に、当該歌の「情熱」を支える天地の極限表現はどのように生み出されてきたのか、歌を取り巻く上代文献や漢籍、さらには後代の文献との関わりといった表現環境から可能性を探ってみることにする。

二、上代文献における天地の極限表現について

そもそも、上代の人々が天地の果てを意識し表現するのはどのような文脈においてだろうか。上代文献における天地の極限表現は、『萬葉集』に十一例、『古事記』『出雲国風土記』『日本書紀』に各一例、『延喜式祝詞』に二例、『懷風藻』に三例と、非常に限定的な用例数となっている(『続日本紀宣命』には用例なし)。文脈上での用いられ方から見てみると、大きく以下の三つに分類できる(次掲A・Cの用例1～19参照)。

A、徳・権力の浸透を示す——神や天皇などの徳や力が天地の隅々まで行き渡ることを意味する…十一例

- (1) 紫震に御して徳馬蹄の極まる所を被ひたまふ。玄扈に坐して、化船頭の速ぶところを照したまふ。 (『古事記』序文)
- (2) 辞別きて 伊勢に坐す天照大御神の大前に白さく、皇神の見齋かし坐す四方の国は、天の壁立つ極み、國の退立つ限り、青雲の靄く極み、白雲の墜り坐向伏す限り、青海原は棹柁干さず、舟の艦の至り留まる極み(略)馬の爪の至り留まる限り、長道間尤く立てつづけて (『延喜式祝詞』祈年祭二月四日)
- (3) 辞別きて 伊勢に坐す天照大御神の大前に白さく 皇神の見齋かし坐す四方の国は 天の壁立つ極み、國の退き立つ限り、青雲の靄く極み、白雲の向伏す限り、青海原は棹柁干さず、舟の艦の至り留まる極み (『延喜式祝詞』六月月次 *用例2とほぼ同じ)
- (4) 神須佐乃袁の命、天の壁立ち廻り坐しき。 (『出雲国風土記』安来の郷の条)
- (5) 上は九垓に冠らしめ、旁々八表に濟す。 (『日本書紀』卷十八安閑天皇元年閏十二月)
- (6) 聖教千禩を越え、英聲九垓に滿つ (『懷風藻』藤原朝臣総前「侍宴」)
- (7) 天照らす 日女の命 天をば 知らしめすと 葦原の 瑞穂の国を 天地の 寄り合ひの極み 知らしめす 神の尊と 天雲の 八重かさ分けて 神

下し いませまつりし

〔萬葉集〕②一六七

(8) く大君います この照らす 日月の下は 天雲の 向伏す極み たにぐくの さ渡る極み 聞こし食す 国のまほらぞ

〔萬葉集〕⑤八〇〇

(9) 天皇の 敷きます国の 天の下 四方の道には 馬の爪 い尽くす極み 舟の舳の い泊つるまでに 古よ 今の現に 万調 奉る官と 作りたる その生業をく雨も賜はね

〔萬葉集〕⑬四二二

(10) やすみしし 我が大君の 高敷かす 大和の国は 天皇の 神の御代より 敷きませる 国にしあれば天地の 寄り合ひの極み 万代に 栄え行かむと 思へりし 大宮すらを

〔萬葉集〕⑥一〇四七

(11) く旅行く君は く行きさくみ 敵守る 筑紫に至り 山のそき 野のそき見よと 伴の部を 班ち遣はし 山彦の 応へむ極み たにぐくの さ渡る極み 国状を 見たまひて

〔萬葉集〕⑥九七一

B、別離における対象との距離の遠さを示す——天の果ての距離ほどに遠方に別れていることを意味する…三例

(12) 相望む天垂の別れ、分れの後長く違ふこと莫れ

〔懷風藻〕石上朝臣乙麻呂「掾公の遷任して京に入るに贈る」

(13) 夕の鴛は霧裏に迷ひ、暁の雁は雲垂に苦しむ

〔懷風藻〕石上朝臣乙麻呂「舊識」

(14) 天雲のそくへの極み遠けども心し行けば恋ふるものかも

〔萬葉集〕④五五三

C、恋情・慕情の強度を示す——相手への思いの強さを誇張する…五例

(15) くさにつらふ 我が大君はく天雲の そくへの極み 天地の 至れるまでに 杖つきも つかずも行きて く 天の川原に 出で立ちて みそぎてましをく巖の上に いませつるかも

〔萬葉集〕③四二〇

(16) 天地の寄り合ひの極み玉の緒の絶えじと思ふ妹があたり見つ

〔萬葉集〕⑪二七八七

(17) 天雲のそきへの極み我が思へる君に別れむ日近くなりぬ

〔萬葉集〕⑱四二四七

(18) 古の ますら男の 相競ひ 妻問ひしけむ 葦屋の 菟原処女の 奥つ城を 我が立ち見ればく 作れる塚を 天雲の そきへの極み この道を行く人ごとに 行き寄りて

〔萬葉集〕⑨一八〇一

(19) 天地の底ひの裏に我がごとく君に恋ふらむ人はさねあらじ

〔萬葉集〕⑮三七五〇

一見して理解されるように、上代文学における天地の極限表現はその半数以上(約58%)が、Aの「神や天皇などの徳や力が天地の隅々まで行き渡ること」を表す際に用いられている。次に多いC(約32%)は、『萬葉集』にのみ見られるものであり、用例(16)(17)に代表されるように天地の極限表現(空間表現)

が直後の心情表現「思ふ」に掛かっていくことで時間的な永続性へと転化していく用法など、独自の展開を遂げている。

Aのうち、(5)『日本書紀』の「上は九垓に冠らしめ、旁く八表に濟す」(「天地の果て四方八方にまで及ぶの意」)は、『新全集』頭注にも指摘されているように、『藝文類聚』治政部上「梁斐子野丹陽尹湘東王善政碑」の「策鏡區域 充塞乎無垠 上冠九垓 旁濟八表」を踏まえている。また(6)『懷風藻』の「九垓」も、『文選』「甘泉賦」第八段に「漂龍淵而還九垓兮、窺地底而上回」(「漂龍淵に漂かびて九垓を還り、地底を窺ひて上に回る」とあり、地底に至る九層構造の地の果てを表現している(遠藤星希「甘泉賦」新釈新考(二)「『東京大学中国語中国文学研究室紀要第十二号』二〇〇九・一〇参照)。「垓」は『文選』「鶴鶴賦」に「託絶垓之外」とあり、李善注に「絶垓、天邊之地也」と記されているように、地の果ての意を有すると理解される(『文選』には他に、「甘泉賦」の「地垓」、「羽獵賦」の「北垓」などの用例が散見される)。Bの(12)「懷風藻」「天垂」(「天の果て」と(13)「雲垂」(「雲の果て」)の「垂」は、それぞれ『礼記』郊特性「地載萬物、天垂象」や『文選』陸士衡「悲哉行」の「鮮雲垂薄陰」に用例が確認されている(『懷風藻全注釈』)。つまり、上代文献における天地の極限表現の一部は、漢籍表現を踏まえるものであることがわかる。

ここで、当時の表現環境として、漢籍には右以外にどのような天地の極限表現があったのかを『文選』で調査すると、(I)～(IV)のパターンが確認できた(次掲I～IVの【】は実例を示す)。

(I)「天末」「天隅」「天涯」

【「天末」 張平子「東京賦」・陸士衡「為顧彦先贈婦二首」・擬行行重行行】／「天隅」 張茂先「鶴鶴賦」／「君は天の一崖に在り」 江文通「古別離」

(II)「極む」「究む」「窮む」「竭くす」「罄す」

【「目四裔を極め」 班孟堅「西都賦」／「境の暨ぶ所を究む」 潘安仁「西征賦」／「天歩を窮め」 鮑明遠「舞鶴賦」／「南極を竭くし、東荒を窮む」 郭景純「江賦」／「地に亘りて天を罄して」 顔延年「宋郊祀歌」】

(III)「八極」「八荒」「八裔」「八紘」「八寓」

【「雲根は八極に臨み」 張景陽「雜詩十首」／「八極も寸眸に圍むべく」 左太沖「魏都賦」／「八荒に走かんとす」 張平子「思玄賦」／「八裔に涎延す」 木玄虛「海賦」／「古先帝の代八紘の洪緒を會覽し」 左太沖「呉都賦」／「威八寓に振ふ」 張平子「東京賦」】

(IV) 東西南北の極地

【「南のかた朱涯を澗し、北のかた天墟に灑ぐ。東のかた析木に演れ、西のかた青徐に薄る」 木玄虛「海賦」／「文軫は桂海に薄り、聲教は冰天を燭す」 江文通「雜體詩三十首 袁太尉從駕淑」*「桂海」・「冰天」は南と北の果てを意味する(『新釈漢文大系』参照)】

右の(Ⅱ)「極む」「究む」「窮む」や(Ⅲ)の「八極」は、先掲『古事記』『延喜式祝詞』『萬葉集』の「くの極み」という表現と類似する。相互の影響関係については今後の課題ではあるが、その類似性に注目しておきたい。また、『出雲国風土記』や『延喜式祝詞』の「天の壁」(原文「天壁」)は、『新全集 風土記』の頭注に『「天の壁」は地の果てに天が壁のように立っているという古代人の認識を示す』とあるが、右の(Ⅰ)「天末」「天隅」「天涯」や先掲『懷風藻』用例(12)の「天垂」と語構成が類似する。管見の限りでは「天壁」の用法が確認できるのは、『全唐詩』巻五十一「初至崖口」の「崖口眾山斷 嶽巖聳天壁」からであり、それ以前には確認できない。しかし、漢籍の「天垂」「天涯」などといった表現などの語構成からヒントを得ている可能性なども考えられ、今後追究していく必要がある。

このように影響関係は未確定ではあるが、上代文学の天地の極限表現が漢籍のそれと発想や表現が類似している状況がある中で、今回考察の対象とする三七五〇番歌「あめつちのそこひのうらに」は類例のない特異な表現だと言える。当該歌は当時の表現環境の中で、どのように生み出されていったのか。まずは原点に立ち戻り、そもそも「あめつちのそこひのうらに」とはどういうことなのか、先行研究の検討を通して考察していくことにする。

三、「あめつちのそこひのうらに」の解釈

先行研究では、「あめつちのそこひのうらに」(原文「安米都知乃曾許比能宇良尔」)の「曾許比」を、方向性を限定しない極限(Ⅱ「果て」と、限定する極限(Ⅰ「底部」)のいずれで解釈するかをめぐり大きく二説ある(次掲Ⅰ・Ⅱ)。さらにⅠは、「宇良」を「内側」の意とするか、「裏側」の意とするかで解釈が分かれており、定まっていない(次掲Ⅰの(a)・(b)参照)。

Ⅰ、「曾許比」を「果て」「極限」と訳出

(a) 「宇良」を「内側」の意とする

『代匠記』(初・精)・『古義』・『全釋』・『総釋』・『窪田評釋』・『全註釈』・『大系』・『澤瀉注釋』・『萬葉集全歌講義』・岩波文庫『萬葉集四』・佐野宏「ソコヒ攷」(『国語語彙史の研究』二十一(二〇〇二))

(b) 「宇良」を「裏側」の意とする

『新全集』・『新大系』・『和歌大系』

Ⅱ、「曾許比」を「底部」「どん底」と訳出

(c) 「宇良」を「内」の意とする

『全注』・『釋注』

まず、「曾許比」についてであるが、右のIの立場であっても、『新全集』頭注に「底は、底部、極限、の意」とあるように「そこひ」の辞書的な意味として「底部」「底」の意を併記している注釈書（『全釋』・『私注』・『新全集』・『和歌大系』）と、「底は、上にまれ、下にまれ、豎にも横にも、行至極る處をいふ言なり」（『古義』）にみるように「底部」に限定されない極限の意として定義する注釈書がある（『代匠記』・『古義』・『全註釈』など）。

この揺れは、「そこひ」が『萬葉集』に孤例のため、「遠く隔たった所。退く^レ方。」（『時代別』）の意とされる「そきへ」「そくへ」との関わりや、平安時代以降の文献に散見される「そこひなき」「そこひもしらず^{（注12）}」との関わりから考察されてきたことによる。

『古義』に「曾許比は、曾久敝、曾伎敝など云ると同言」とあるが、『萬葉集』中の「そきへ」（二例）、「そくへ」（三例）の用いられ方をみると、「天雲のそくへ（そきへ）の極み」という表現はあるものの（前掲用例14・15・17・18）、「天地のそくへ（そきへ）の極み」とは歌われていないことに注目される。このことと關るが、「天地の寄り合ひの極み」はあるが（前掲用例7・10・16）、「天雲の寄り合ひの極み」はなく、「天雲の向伏す極み」はあるが（前掲用例8）、「天地の向伏す極み」はない。つまり「天地」は「天雲」のように詠歌主体から「退く^{（退）}」つまり離れていくものではないが、極限のところでは天と地平が寄り合つて見えるのに対し、「天雲」は詠歌主体から「退き^{（退）}」離れていつて極限のところでは「地」に接して「向伏す」ものとしてあるというように、『萬葉集』中では使い分けられていることが理解される。このように、「そこひ」は「天地」に対して、「そくへ（そきへ）」は「天雲」に対してと使い分けて用いられていることから、「そくへ（そきへ）」が「そこひ」と「同言」ではないことがわかる。また、「そこひ」を「そくへ（そきへ）」と同語とする場合、音韻変化の可能性が考えられるが、「そくへ（そきへ）」の「へ（辺）」の意でイ列甲類の形態素がない点からみても、同語とはみなしがたい。

ここで注目されるのが『全註釋』の「ソコヒは、底比。動詞底フの名詞形。最奥部の意で、はて、極限をいう。（傍線稿者）である。「そこひ」の動詞形「そこふ」は、『萬葉集』中に確例をみない。しかし、先掲佐野宏論文において「そく（離く）」の末尾韻をオ列乙類にした動詞「そこふ」を想定すればその連用形名詞としての「そこひ」を定位できるとし、日本書紀歌謠「みなそこふ^{（注13）}」臣の嬢子を 誰養はむ^{（注14）}」を実例として挙げている。従来、「みなそこふ」は未詳の枕詞として扱われてきたが、佐野論文で「ソコフ」を『遠くに離れる』義の動詞とみれば、『ミナソコフ』は「ミ」を水の義とみて『水が遠くに離れる』義に分析される。（中略）文脈からは玖賀姫が盛年を過ぎて衰えようとしている意味に解釈される。（略）文脈上『うらぶれる』乃至は『力無く萎える、枯れる』という義になる」とあるのが説得力に富む。とすれば「そこひ」は底部に限定されるのではなく、次第に離れる意の「そこふ」の名詞形として、「次第に離れる場所の着地点」すなわち「極限」として理解される。

結局、「離れる」意の動詞「そく（離）」から、「際限」の意の名詞「そき」や「離れていく方向」の意の名詞「そくへ（そきへ）」、「離れていった場所の着地点・際限」の意の名詞「そこ（塞）」、動作の継続の接尾語「ふ」のついた動詞「そこふ」とその名詞形で「次第に離れていった着地点^{（注15）}果て」の意の「そこひ」が派生していったと理解される。

先掲II「そこひ」を『底部』『どん底』として訳出する立場に関しては、阿蘇瑞枝『萬葉集全歌講義』が、当該歌は「我がごとく天地の底ひの裏に君に恋ふらむ人はさねあらじ」ではなく「天地の底ひの裏に我がごとく君に恋ふらむ」とあることから、「天地の底ひの裏」は「我がごとく君に恋ふらむ人」が決していない場所を示しているとして、「世の中のどん底に沈んで」とする『全注』・『釋注』の説を斥けている。また、平安時代以降に「そこひ」が底部を指す語となっ

た点について、先掲佐野論文が、「際限」を指す点で、『ソキ』・『ソコ』・『ソコヒ』は共通するが、しかし、『萬葉集』や後世の例からしても、これらは、次第に意味分担をしていったものとみられ、『ソキ』は水平方向の、『ソコ』・『ソコヒ』は垂直下方方向の『際限』をいうようになっていった(略)『ソコ』が垂直方向の『底』と結びつき、『ソコ』底部が第一義として一般に用いられるに及んで、『ソコヒ』は『そこひ』を介して『底部(底る)』の義に固定化していった」と指摘している点も考慮すると、『萬葉集』の「そこひ」を底部とする立場は妥当とは言えない。

次に、「安米都知乃曾許比能宇良尔」の「宇良」の検討に移る。先掲I (b) の『新全集』・『新大系』・『和歌大系』では「裏側」の意味で解釈されているが、それ以外の注釈書はすべて「内側」と訳出している^(注15)。

いずれの注釈書もその根拠を明記していないが、以下の二点において、「裏側」の意味で解釈するI (b) が支持される。

第一の根拠として、当該歌を除き『萬葉集』中では、空間を表す仮名表記「宇良」は、次掲用例(20)(21)からわかるように「裏側」の意味であることが挙げられる。

- (20) 針袋取り上げ前に置き返さへばおのともおのや宇良毛都藝多利 (18四一二九)
- (21) 伊蘇能宇良尔常夜日来住む鴛鴦の惜しき我が身は君がまにまに (20四五〇五)

右掲(20)の「宇良」は、第三句目「返さへば」とあることから「袋の裏側」であり、(21)の「宇良」は類似の発想歌「我が豊三重の川原の磯裏尔かくしもがもと鳴くかはづかも」(9一七三五)からわかるように、岩石の裏側の陰になっている部分を指す。

第二の根拠として、空間の内側を表現する場合に『萬葉集』では、三十九例中三十六例が訓字「内」「中」または仮名「宇知」表記を選択していることが挙げられる(三三例の例外については後述)。

- (22) く我妹子と二人我が寝し枕づく嬌屋之内尔 (2二一〇)
- (23) く我が大君の天の下八嶋之中尔国はしも多くあれども (6一〇五〇)
- (24) 大宮の宇知尔毛刀尔毛光るまで降らす白雪見れど飽かぬかも (17三九二六)
- (25) く佐保能宇知乃里を行き過ぎあしひきの山の木末にく (17三九五七)

右の(24)(25)の「宇知」表記例からもわかるように、当該歌三七五〇番歌も、「内側」の意味で詠むのであれば「天地のそこひの宇知に」と表現されているほうが『萬葉集』中の在り方に即していることになる。にもかかわらず大半の諸注釈書が「宇良」を「内側」としている背景には、空間の「内側」を意味し「うち」と訓む「裏」表記例(次掲三例)の存在があるからではないかと忖度される。

- (26) この花の「与能裏波百種の言持ちかねて折らえけらずや」
 (8)一四五七
- (27) 春裏之樂しき終へは梅の花手折り招きつつ遊ぶにあるべし
 (19)四一七四
- (28) 川渚にも雪は降れれし宮裏千鳥鳴くらし居む所なみ
 (19)四二八八

右の(26)傍線部は通訓「ひとよのうちは」である。この歌は問答形式の答歌であり、直前の問歌「この花の「与能内尔百種の言そ隠れるおほろかにすな」(⑧一四五七)に「内」とあるのを答歌で「裏」と変えているのは変字法の一つと理解される。おそらくは、問歌の「言そ隠れる」を受けて、表から見えない、隠れている意を持つ「裏」を選択したのではないかと考えられる。(27)は「はるのうちの」で訓の異同はない。「春裏」は「時間+裏」の用例として注目され、家持「述戀緒歌一首 并短歌」(17)三九七八〜八二二)の左注に「右三月廿日夜裏忽兮起戀情作」との関わりが考えられる(芳賀紀雄氏「萬葉集における中国文学の受容」『古代日本の言語文化』二〇〇六)。場所を示す「内」ではないことを「裏」表記で示している可能性がある。(28)は「みやのうちに」で訓の異同はないが、題詞に「十二日侍於内裏聞千鳥喧作歌一首」とあるのを受けての表記と判断される。『萬葉集』中、「宮のうち」の表現は他に「大宮の内まで聞こゆ」(③二三八)・「大宮の内にも外にも」(17)三九二六・(19)四二八五)とあり、三例とも原文「内」表記であるが、いずれも題詞や左注に「内裏」表記を持たないことがその証左となる。このように、空間を表す文脈での「裏」表記を「うち」と訓む事例には特別な事情が考えられるのであり、『萬葉集』中の空間を表す「宇良」表記例は「裏側」の意であることや、空間を表す「宇知」表記の用例に「裏側」を意味する事例が確認できないことなどから、当該三七五〇番歌の「宇良」も素直に「裏側」の意で理解するのが妥当である。

以上、本節では三七五〇番歌の第一・二句目「安米都知乃曾許比能宇良尔」の「曾許比」は底部に方向性を限定しない極限を意味し、「宇良」は「内側」ではなく「裏側」であることを確認した。次節では「天地の果ての裏側」という特異な発想を支える表現環境について、その可能性を探ってみることにする。

四、「天地のそこのら」の発想を支える表現環境

(四)一、表現環境の検討(その一)

管見の限りでは、三七五〇番歌のように「天地の果ての裏側」そのものを表現する例は確認できない。しかし「天地の表裏」という発想であれば、「天地裏」「天外」「天表」「天裏」など、ヒントとなる用例を確認できる。

「天地裏」という表現が『大藏經』にある(次掲用例29傍線部分)。

- (29) 我有一句語。遍在天地間。天地亦不會。化爲水與山。日月亦復爾。四序相循環。人居天地裏。譬如魚在水。欲識水與魚。由來只一揆。我作是説句非句。)

〔大藏經〕竺偃和尚語錄卷下之下〕

傍線直後の「譬如魚在水」から、傍線部分は「人が天地の内側に居る」ことを表現していると理解される。ただし、漢籍における天地に関する「裏」は、文脈によっては「天外」と同義を示す場合があることが、次掲用例(30)『朱子語類』から確認できる。

(30) 而今若就天裏看時 只是行得三百六十五度四分度之一 若把天外來說 則是一日過了一度 季通常有言 〔論日月 則在天裏 論天則在太虛空裏 若去太虛空裏觀那天 自是日月 導得不在舊時處了〕

〔朱子語類〕卷第二 理氣下 天地下)

右掲用例(30)は、天や太陽・月の運行とその関係について、朱子と義剛との問答場面である。義剛が「天は一日に一周し、太陽が一度遅れるのであり、天が一度行きすぎるのではない」という伯靖の説を挙げたところ、朱子が『礼記』『月令』の疏を取り出して反論し、「天の内側(＝天裏)から見る時には、「ちょうど三百六十五度と四分の一度運行しているように見える。もし、天を外側(＝天外)から見れば、一日に一度行き過ぎていてるのだ。」と述べ、更に季通(蔡元定)の説を以下のように援用している。「太陽と月については天の内側から論じるのであり、天については広々とした天空の外側から語る」のである。もしあの広々とした天空の外側から天を眺めれば、当然太陽と月は(一日で)もとの場所に戻らない(『朱子語類』訳注 卷一〜三 『朱子語類』訳注刊行会 編者 垣内景子・恩田裕正 傍線稿者)。

注目されるのは、「天裏」「天外」「論天則在太虛空裏」である(右掲用例30傍線部分参照)。「天裏」＝「天の内側」に対して、「天外」は「天の外側」を表すが、そのことを、天を包み込む宇宙空間から見て(「太虛空」裏」と表現している。即ちここでは「天外」と「裏」がイコールの関係として表現されている。この「天外」は、次掲(31)『後漢書』『文選』にも確認できる語句である。

(31) 踰處瀕於右冥兮 貫倒景而高厲 廓盪盪其無涯兮 乃今窮乎天外 〔後漢書〕張衡列傳・『文選』張平子「思玄賦」)

右の(31)「天外」は、「薄暗いなかで、混沌を越えて、傾倒(太陽と月)を追い越して高く昇る。(目の前は)開けた空間で果てしなく、今こそ天の外を窺うことができたのである」(『全譯後漢書』第十五冊(渡邊義浩・渡邊將智編 汲古書院 傍線稿者)とあるように、「天の外」の意である。

また、『藝文類聚』に「天表裏」(次掲32)、『文選』に「天表」(次掲33)といった表現があり、当時の表現環境として、天の表裏という発想のヒントの存在を看取することができる。

(32) 渾天儀曰 天如雞子 天大地小 天表裏有水 〔藝文類聚〕卷一 天部)

(33) 排飛闐而上出 若遊目於天表 似無依而洋洋 〔文選〕班固孟堅 西都賦)

右掲(32)は「渾天儀に曰はく、天は雞子の如し。天は大、地は小にして、天の表裏に水有り」と、天の外側と内側に水が存在していることを記している。(33)は「飛闔を排いて上り出づれば、目を天表に遊ばしむる如く、依る無くして洋洋たるに似たり」(「飛闔の屋根に張り出した小門をおしひらき上に出ると、あたかも天外をはるかに見たすかのようで、すぎるものとしてなくて身は虚空にただよふかのよう」『新釈漢文大系 文選 賦篇上』の訳)と、「天表」は「天外」と同義で用いられている。

以上、当該歌「あめつちのそこひのうらに」が生み出される発想基盤として、「天地裏」をはじめ「天裏」「天外」「天表」「天表裏」といった、「天地の表裏」に関する漢籍表現からヒントを得ることのできる環境があつたことを見てきた。

四の二、表現環境の検討(その二)

当該歌の「天地の果ての裏側」という発想を支える空間認識に関し、もう一つの可能性として女性と裁縫との関わりに着目したい。

『蜻蛉日記』中巻(安和二年一月)の記述に、「天地を袋に縫ひて」という寿歌詞が引用されている(次掲用例34)。「狭衣物語」にも同じ寿歌の一部が引用されている(用例35)。

(34) かくてはかなながら、年たちかへる朝にはなりにけり。(略)はらからとおほしき人(「妹」、まだ臥しながら「物きこゆ。天地を袋に縫ひて」と誦するに、いとをかしくなりて、「さらに身には、三十日三十夜は我がもとに、と言はむ」と言へば、

(35) 持ちたまへる扇のうち置かれたりけるに、手習したと見ゆるを、(略)取りて見たまへば、手づからの手習なるべし、(略)「天地を袋に縫ひて」とあるは、(今姫君の)母代が(姫に)習はしきこえたる祝言なめりと見るに、

右の(34)は正月元日に、寢床の中で「天地を袋に縫ひて」という寿歌詞を唱えている妹を笑っている場面であり、(35)は姫君が母親から教わった寿歌詞を扇に書いた手習いを狭衣中将が見ている場面である。

これについて江戸時代の伴信友が随筆『比古婆衣』(『日本随筆大成 第二期第14巻』吉川弘文館 一九七四)の「天地を袋に縫ひて云々といへる事」の項で、(34)の『蜻蛉日記』の本文を挙げつつ「こは当時女がたの、年の始に誦する言寿歌の詞なりとぞきこえたる。然るは女房私記といふ書に、(略)禁中様女中御祝の次第、正月御鏡のもちひ祝ふ時の歌として、三首ある末に、天地を袋に縫ひて幸を、入れてもたればおもふことなし。とありて右の歌ども三べんよむべし。(略)歌の意は、年の始に袋を縫ひて、一年の幸を入る、よしの寿言するが、そのかみの風俗なりしなるべし。」と指摘しており(傍線稿者)、裁縫をする女性の唱える言寿歌としてあつたことが理解される。この「天地を袋に縫ひて」という発想について、大系本『かげろふ日記』や『全講蜻蛉日記』(喜多義勇 至文堂)、『狭衣物語全註釈V 卷三(上)』(狭衣物語研究会編 おうふう)に『管子』との関わりが指摘されている。

(36) ① 天地萬物之橐 宙合有橐天地 (中略) 天地直萬物 故曰萬物之橐 ② 宙合之意 上通於天之上 下泉於地之下 外出於四海之外 合絡天地 以為一裹（『管子』 卷第四 宙合第十一）

右の傍線①部分「天地は萬物の橐たぐにして、宙合は有天地またてんちを橐たぐす」とは、「天地は万物を入れる袋であり、宙合はさらに天地を入れるものである」（『新釈漢文大系 管子 上』）ということであり、「天地は万物を包むものであるとする概念が読み取れる。『天地の袋』という表現は、このような中国思想の影響を受けたもの」（『先掲『狭衣物語全註釈V 卷三（上）』）と理解される。注目されるのは、傍線①の後半部分「宙合は有天地またてんちを橐たぐす」と傍線②「宙合の意は、上は天の上に通じ、下は地の下に泉いづみび、外は四海の外に出で、天地を合絡して以て一裹いっくわと爲し」である。傍線①後半部分では、宇宙に相当する「宙合」がさらに天地を入れるものとして述べられており、その「宙合」について傍線②で、「上は天の上のままで至り、下は地の下にまで及び、四方は四海の外にまで広がり、天地を包括して一包みとし」（先掲『新釈漢文大系』の訳による）と説明している。右の内容はまさに、三七五〇番歌の表現する天地の寄り合う果て（＝「合絡天地」）の外側（裏側）を表現している。

『管子』の影響のもと、女性が縫う袋を、宇宙に包括される天地の袋と見立てる思想があったことは、当該三七五〇番歌の発想基盤を考える上で示唆深い。無論、安和二年（九六九年）の『蜻蛉日記』と、七四〇年前後のものと考えられる三七五〇番歌とは約二百年以上の開きがあるが、三谷栄一氏は、(34) (35) の二例について、この寿歌詞が寝床で唱えられるほどに形式化し、手習言葉化するほどに普遍化していたことを示すと指摘しており（「おまじないと和歌」『實踐國文學 第十九号』一九八一）、すでに安和二年の段階で「形式化」していたとすれば、奈良時代後期に「天地を袋に縫ひて」という寿歌詞に繋がる発想の萌芽があった可能性は考えられる。（注一） 事実、袋を縫うことを歌っている作品が萬葉後期に一例ある。

(37) 生ける世に我はいまだ見ず言絶えてかくおもしろく縫へる袋は

（『萬葉集』 ④七四六）

右は大伴宿禰家持が坂上大嬢に贈った十五首中の一首で、大嬢の縫った袋をプレゼントされた家持が、それを絶賛している歌である。『萬葉集』中、人麻呂歌集「住吉の波豆麻の君が馬乘衣さひづらふ漢女を据ゑて縫へる衣ぞ」（⑦二二七三）を始め、「衣」を縫う歌は六例確認できるが（他に⑦一三一五・⑩二〇六四・⑩二〇六五・⑫二九六七・⑬三七九一）、「袋」を縫うことはここで初めて登場している。平安時代前期の「天地を袋に縫ひて」へと繋がる地盤が萬葉後期にできつつあったことを窺わせる。ここに、三七五〇番歌の「天地の果ての裏側」という空間認識は、裁縫に関わる女性ならではの発想である可能性をみておきたい。

五、結び

小稿では、「情熱」の歌人として複数の教科書で扱われている狭野弟上娘子の作品について、教科書掲載の和歌選定に大きな影響を与えたと考えられる斎藤茂吉『万葉秀歌 下』にその「情熱」を代表する歌として指摘されている三七五〇番歌に着目し、その「情熱」がいかにならされたのか、基礎的考察を行った。

『萬葉集』の天地の極限表現は、「天雲のそくへ（そきへ）の極み」「天地の寄り合ひの極み」などにみるように「」の極み」という定型表現を有するが、当該三七五〇番歌のみは、「あめつちのそこひのうらに」という特殊な表現となっている。この特殊性は『萬葉集』の中だけにとどまらない。『萬葉集』『古事記』『出雲国風土記』『日本書紀』『延喜式祝詞』『懷風藻』などの上代文学作品における天地の極限表現に漢籍のそれと発想や表現において容易に類似性を見いだせる状況にある中で、当該表現のみは異質である。

三七五〇番歌の特異表現「あめつちのそこひのうらに」は一般的に「天と地の果てに」と理解されてきたが、実は先行研究ではその解釈に揺れが見られる。しかし「そこひ」は底部に方向性を限定しない「極限」を意味し、「宇良」は「内側」ではなく「裏側」と理解するのが妥当だと判断できる。そしてこの「天地の裏側に」という空間認識が生み出される発想基盤として二つの表現環境を指摘することができる。第一に、天地の表裏を表す「天地裏」「天外」「天表」「天裏」などといった漢籍表現との関わりである。第二に、裁縫をする女性ならではの空間認識、特に後代の『蜻蛉日記』引用寿歌詞「天地を袋に縫ひて」にみる『管子』の宇宙観（「女性が縫う袋を宇宙に包括される天地の袋と見立てること」との関わりである。いずれも可能性のレベルではあるが、当該歌をめぐる表現環境として叙上のような選択肢があったことを確認しておきたい。

さて、「天地の裏側」という発想は漢籍にヒントを得ている可能性が考えられるとしても、単に「天地の裏側」と表現しているのではなく、「そこひ」という日本古来の語を用いて「天地の果ての裏側」を歌っている点に留意しておく必要がある。これには「天地の寄り合ひの」極み」などに代表される「極み」という語では表現しきれない、「そこひ」が有する語の記憶とでもいべき語性が深く関係していると考えられる。つまり、第三節で確認した「次第に離れる」意の「そこひ」の名詞形として、「次第に離れる場所の最終地点」という「そこひ」が有していた距離感覚（＝漸層的な奥行）こそ、詠歌主体の心情（＝どこまでもどこまでもという心情）を言い表すのに相応しい語として選択されたのではなからうか。即ち、「天地の果てに至るまで、どこまでもどこまでも探しに行つて、更にもその裏側の天上・地下などを探したって、私ほど自分の夫に激しく恋している女性など見つかりはしないわ」という娘子の「情熱」を掬い取る語としてある。

『窪田評釈』の【評】に「宅守が『天地の神なきものに』と云ひ、『短き命も惜しけくもなし』と云つてゐるのに對し、娘子もそれに劣らぬ純粹の心を持つてゐることを云つてゐるもので、双方の歌がおのづからにして誓詞の如くなつてゐるものである。」とあるが、当該表現が宅守歌の「天地の神なきものにあらばこそ我が思ふ妹に逢はず死にせめ」（⑮三七四〇）等に対し「劣らぬ純粹の心を持つてゐることを」歌う意図のもとになるものであったとしても、そこから直ちに「天地の果ての裏側に」という発想と「あめつちのそこひのうらに」という表現に結びつくものではない。小稿で見えてきたような漢籍の表現環境（＝「天地の裏側」という発想と表現）にヒントを得ているのみならず、それだけでは表現し尽くせない自分の「情熱」を表すための語として古来の言葉（＝「そこひ」）をあえて選択するという娘子の「冷静な知」があつて初めて可能となったものと考えられる。まさに娘子の「情熱」は、娘子の「知」に裏打ちされた「冷静」のもとに成

り立つものであるといえる。^(注10)

- (注) 小稿引用本文は以下の文献を参考とした。『萬葉集CD-ROM版』(塙書房)、『古事記』『出雲国風土記』『日本書紀』『蜻蛉日記』『狭衣物語』(『新編日本古典文学全集』小学館)、『古今集』『後撰集』(『新編国歌大観』角川書店)、『延喜式祝詞』(和泉書院)、『文選』(中華書局影印本)、『文選』(新釈漢文大系 明治書院)、『藝文類聚』(中華書局影宋刊本)、『藝文類聚』(卷一) 訓読付索引(大東文化大学)、『懷風藻全注釈』(笠間書院)、『懷風藻』(『日本古典文学大系』)、『管子』(『新釈漢文大系』明治書院)、『朱子語類』(『全譯後漢書』(汲古書院)、『大正新脩大藏經』第八十卷(大正新脩大藏經刊行会)。
- (1) 大修館312、筑摩書房322・323、教育出版古B 309などがある。
- (2) 「狭野茅上娘子」とする写本(類聚古集・細井本・無訓活字本)もあるが、他の古写本では「狭野弟上娘子」とあるのに従う。
- (3) 卷十五の三七・三三三七八五の合計六十三首からなる中臣朝臣宅守と狭野弟上娘子との贈答歌群の一首である。
- (4) 品田悦一「誰が子にもかも止まず通はむ―中臣宅守と狭野弟上娘子の贈答歌私解―」(『言語情報テキストvol.12』二〇〇五)に同様の指摘がある。稿者の調査では藤原俊成「古来風体抄」や俊成女「無名草子」をはじめ、江戸時代の『代匠記』や『古義』などでもほとんど評価対象となっていない。
- (5) 娘子歌二十三首の表現の特徴を分析した先行研究としては、服部喜美子「中臣朝臣宅守与狭野茅上娘子贈答歌」(『万葉女流歌人の研究』桜楓社・一九八四)があり、「類歌性が乏しく独自の表現が多い」「強調の助詞を三つも四つも重ねて用いる」「句切れが多い」「直接相手に呼びかけ命令する語気(希望・命令)を用いる」と指摘されている。小稿で注目したいのは、例えば服部論文が指摘する「独自の表現が多い」ということと背景である。いかにしてその独自性が可能となっているのかを探る論は管見の限りでは確認できていない。
- (6) ⑨七七一は、題詞に「四年壬申藤原宇合卿遣西海道節度使之時高橋連蟲麻呂作歌一首」とあり、西街道の節度使としての任務を歌っていることが記されているので、権力の及ぶ範囲を意味すると解釈され、Aに分類した。
- (7) Aの(1)『古事記』序文の用例は、天子の徳を得て今上天皇の聖徳が「馬の蹄の至るところ地の果てまで覆い、また船のへさきの及ぶところ海の果てまでお照らしなさる」(『新全集』)ことを表現している。「馬の蹄の極まる」ところ「船の頭の速ぶ」ところは「延喜式祝詞」(用例2・3)の「馬の爪の至り留まる限り」「舟の艫の至り留まる極み」と類似する表現を有する。また「祝詞」の「天の壁立つ極」は、用例(4)の「出雲国風土記」の神須佐乃袁の行動「天の壁立ち」とも共通している。この「祈年祭の祝詞」は、十二段構成であり、参集している神主・祝部等に宣る詞のあと、種々の神々を祭る詞が十段に亘り述べられている。その中でも「天照大御神に白す詞」の段に用いられているのが、天地の極限表現である。この段冒頭には「辞別きて、伊勢に坐す天照大御神の大前に白さく」とあるように、「これまで祭ってきた神々への祝詞とは明確に区別」(粕谷興紀『延喜式祝詞』和泉書院)していることがわかる。(5)の『日本書紀』の事例は、大伴大連が勅命を奉じている文章に出ており、天皇の徳が天地の果て四方八方にまで及ぶことを「上冠九垓、旁濟八表」と表現している。用例(6)の『懷風藻』も、天皇の徳の誉を天地の極限を意味する「九垓」を用いて称える。Aはいずれも、天皇や神須佐乃袁、天照大御神といった位相で用いられていることがわかる。
- (8) ⑩四二四七について、『萬葉集(五)』(『岩波文庫』二〇一五)に「空間の無限の遠さを言うその語を、いつまでもという限りない時間の表現に用いる」とある。
- (9) 「天の壁立つ」について、注釈類では「天壁」は水平線・地平線のことと、国土の果ての意味。天の壁がそそり立ち、天と地が接するところと考えられていた(松本直樹『出雲国風土記注釈』新典社二〇〇七)・「地平線のはてに空が壁のようにそそり立つさま」(荻原千鶴『出雲国風土記 全訳注』講談社学術文庫一九九九)と説明されている。

- (10) 多田一臣『萬葉集全解』（筑摩書房 二〇〇九）では、「ウラ」は『裏』で、表から見えない隠れたところ。天地の果ての隅々までの意」とし、「天地の果てのその隅々に至るまで、私のようにあなたに恋い焦がれている人はけっしてないだろう」とする。しかし、「表から見えない隠れたところ」という「裏」の意から、「天地の果てのその隅々に至るまで」という解釈を導き出している点に飛躍がある。
- (11) 『全注』では「この世のどん底に沈んでいて」と、心情表現として解釈している。
- (12) 「そこひなきふち」やはさわぐ山河のあさきせにこそあだなみはたて」（『古今集』・⑭七二二）では、底も知れない深い淵（＝「底部」）のことを表現しており、また「玉もかるあまにはあらねどわたつみのそこひもしらず入る心かな」（『後撰集』⑫七九八恋）でも、深さのわからない海の底（＝「底部」）のことを表している。
- (13) 同氏論文では、この動詞「そこふ」について「ソク（離）」の義に、状態性乃至は、作用の継続性を付加した「次第に遠くに退く・離れてある」の義であろうと推定されると指摘されている。
- (14) 『古事記傳三』が「天之常立神、姓氏録（伊勢朝臣條）に神底立尊とあり、（天之底と云むことはいかゞ、と思ふ人あるべけれど）凡て底とは、上にまれ下にまれ横にまれ、至り極まる處を、何方にても云り、（略）曾伎は曾久を體言に云るにて、（中略）又塞を曾許と訓も、境域の極界の地なるを謂ふ」（傍線稿者）と指摘するところの的確さが理解される。
- (15) 当該歌の「宇良」は、『日本国語大辞典』『大辞林』『角川古語大辞典』などの代表的な辞書の「うら」の項目において、「内側」の意味を持つ用例の唯一例として掲載されており、辞書の定義に関わる点でも注目される。
- (16) 『比古婆衣』に引用されている『女房私記』は、『国書解題』に、「写本一卷、著者未詳、女房の年中行事を記したるものなり」とある。
- (17) 萬葉人が読んでいたとされる『文選』の「過秦論」に「有席卷天下、包舉宇内、囊括四海之意、并吞八荒之心。（＝天下を席卷し、宇内を包舉し、四海を囊括するの意、八荒を并吞するの心有り）」とある点に注目される。ここに示されているのは、天地のすべての国々を包み取って、囊すなわち袋に入れて括るように果てまで残らず自分のものにしよとすることを表現している。萬葉人が、天地を袋に入れるという空間認識を知っていたことが窺知できる。
- (18) 先行研究（先掲注4品田悦一論文）では、宅守の抑制された歌い方（＝「冷静」な歌い方）が娘子の「情熱」を際立たせているのだという指摘があり、首肯される。しかし小稿の考察によれば、その娘子の「情熱」も実は当時の漢籍や日本古来の言葉をあえて選択するといった「知」に裏付けられた「冷静」のもとに成り立つと考えられる。